

「エリナー嬢の外套」のテーマと 作者の意図*

瀬戸山 徹二郎

On "Lady Eleanore's Mantle"
——Its Theme and Hawthorne's Intention——

By
Tetsujiro SETOYAMA

"Lady Eleanore's Mantle," one of Nathaniel Hawthorne's early tales, is comparatively well known to his students but can hardly be said to have been highly rated.

It has been taken as a bald and traditional allegory with too much repetition of its moral.

In this thesis, the writer's aim is to prove that the theme is the birth of a true American independent of the past of England.

Mention is made, also, of the author's intention of this work.

I

この論稿のねらいはナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) の短編「エリナー嬢の外套」(*Lady Eleanore's Mantle*) のテーマを追求することにある。この作品は比較的有名ではあるが、その評価は決して高いものではない。むしろ、作者の他の作品と比較して、意味が浅薄であり、あまりにも直接的なアレゴリーとなった作品の例として挙げられてきた。このような評価はこの作品のテーマをその寓意の中に求めることから生じたものである。筆者はこのことに疑問を感じ、作品の主人公をエリナー嬢に恋する若者と考え、彼の中に作品のテーマを見出そうとする。

また、この作品を発表した月刊誌と作者の意図についてもふれる。

* 水産大学校研究業績 第737号、1975年1月20日受理。
Contribution from the Shimonoseki University of Fisheries, No. 737.
Received Jan. 20, 1975.

「エリナー嬢の外套」は作者が34才の時の1838年12月に *The Democratic Review* という月刊誌に発表され、1842年発行の短編集 *Twice-Told Tales* に収められたものである。これはまた、「総督官邸物語」(“Legends of the Province House”)の中の三番目の物語であり、他の三つの作品と同様に、それぞれの物語の前後に語り手や場所の状況を説明する前書きと後書きがついている。これらについては後に詳述する。

この作品をまともに検討した批評家は、筆者の知る限り、ダブルデイ (F. N. Doubleday) のみである。若干の批評家がこの作品にふれてはいるが、いずれも彼の批評に包含されるものであり、これをもってこの作品の評価と判断しても大過ないと思われる。以後、主として彼の批評を紹介しながら、筆者の考えを述べていきたい。

彼に代表される多くの批評家の見解は、この作品を明白なアレゴリーとみることである。つまり、エリナー嬢を主人公として、彼女の高慢な性格の罪深さとそれがもたらす悲惨な結末というアイロニーを寓意とするアレゴリーとみるのだが、確かにこのような読み方は容易である。なぜなら、同様の主旨は何回も繰返し強調されているからである。例えば、最初の二箇所原文のみを挙げると、まず語り手によって

Lady Eleanore was remarkable for a harsh, unyielding pride, a haughty consciousness of her hereditary and personal advantages, which made her almost incapable of control. Judging from many traditionary anecdotes, this peculiar temper was hardly less than a monomania; or, if the acts which it inspired were those of a sane person, it seemed due from Providence that pride so sinful should be followed by as severe a retribution.¹⁾

と彼女の傍若無人な高慢さと将来の神からの応報が語られた後、次はクラーク医師 (Dr. Clarke) によって

She seeks to place herself above the sympathies of our common nature, which envelops all human souls. See, if that nature do not assert its claim over her in some mode that shall bring her level with the lowest! p. 202

と来るべき破滅が予言され、それが現実となった時、再び語り手が彼女を糾弾して執拗に同様の主旨を語り、最後に彼女自身が *Pride, Mantle* などと大文字入りで告白する。このような繰返しの他にも、彼女の気位の高さや大衆蔑視を表わす語句は頻出して、読者はほとんどそれ以外の読みを阻止されている。

ホーソンの文体について詳述する余裕はないが、ごく大ざっぱに概略すれば、洞穴のような人間の内面の世界を、過去や架空のある事件と関連させ、象徴やゴシック的要素を駆使し、曖昧に、暗示的に描くことにあると言えよう。「ホーソンの最も効果的な創作法においては、アレゴリーはそれとなく肉付され、暗示され、その訴えも説教的というより情緒的である。」(In his most effective work the allegory is more subtly embodied, — it exists in suggestion, and its appeal is as much emotional as didactic.)²⁾しかるにこの作品では、エリナー嬢がもっとも表面的な性格の高慢に直線的に結びつけられ、ほとんどその代名詞になってしまっているし、寓意をあまりにも強調するために、暗示性も曖昧性も消滅してしまっている。一読しただけで、この作品の最大の欠点はこの繰返しの強調にあることが理解される。「エリナー嬢はとうてい象徴と呼べるまでにはなっていない。高慢の具現者としての彼女は、高貴というより低俗に墮しているように見えるし、高慢もあまりにも明白でうんざりするほどだし、メロドラマ的描写も不必要に思える。あたかも、たとえば、放火はよくないということを詳細に、大真面目に説明しているかのようだ。」(Yet

1) *Twice-Told Tales*, Everyman's Library, 1967, p. 200

以下「総督官邸物語」の引用は全てこの版による。

2) Cohen, B.B. (ed.), *The Recognition of N. Hawthorne*, Univ. of Michigan Pr., 1969, p. 138

she is hardly a successful symbol. Her manifestation of the sin of pride seems more vulgar than aristocratic; and her pride is so obviously repellent that its melodramatic representation seems gratuitous. It is as if one were to explain in great detail and with portentous earnestness that — let us say — arson is undesirable.)³⁾ というダブルデイの批判は適切である。彼はこの作品のアイロニーは説教に近くなってしまっており、読者の想像に訴えるものが無いことを惜しんで批評を終えている。筆者が重要視する若者については、ゴシック的恐怖を付加したのみで、このアレゴリーをより意味深いものにしたとは思われないと付言しているにすぎない。また、ワゴナー (H. H. Waggoner) が「ホーソンの信念がこの上なく確かなものである場合は彼はもっとも伝統的な書き方をする。」(Where Hawthorne's beliefs are surest, he writes most traditionally.)⁴⁾ と言って、その例としてこの作品を挙げているが、この場合の「伝統的書き方」とは、バンヤンやスペンサー以降のイギリスのアレゴリーと同一線上にあることを意味し、つまりはこの作品の手法上の価値はなく、作品としても劣ることになる。なぜなら、ホーソンの真価は従来のアレゴリーを凌駕した彼独特の象徴的手法にあると信ずるからである。

しかし、この作品には今迄述べてきた批評以外の読みは出来ないのだろうか。筆者はこれを読み返す度に、エリナー嬢よりも彼女に恋する若者に興味をそそられ、彼の中に作品としてのより深い意味があるとの感を強くした。また、そのように視点を変えることによって、新たな象徴も見出されるように思える。この作品を駄作として片づけるに忍びない気持と天邪鬼的強引さも手伝って、今迄と異なる読みを試みようと思う。

II

筆者が最初に注目したいのは母国と植民地の関係である。この観点からもう一度作品を読みなおしてみる。まず、物語の中心地となっている総督官邸にイギリス政府の出先機関である。そこに、貴族制度の申し子ともいべき誇り高きエリナー嬢が総督の擁護を求めてやってくる。ボストン港から邸までは四頭立ての公式馬車で、前後にエスコートがつき、騎士たちの腰にピストルがつけられているのを除いては、全く本国の流儀どおりである。邸に到着した瞬間に轟くはずであった祝砲の代りには、Old South Church というボストンの有名なプロテスタント教会の吊いの鐘が鳴り響いた。その鐘に憤慨するのは、本国から来たばかりの将校であり、それをたしなめるのは、人民党の有名な指導者のクラーク医師である。つまり、この物語の中央部には母国そのものがおかれ、その周囲を植民地の大衆が見物人としてとり囲んでいる。中央に列席している植民地人は、代表者のクラーク医師のみである。言うまでもなく、この円の中心には、「女王のような威厳」(queenly stateliness)をそなえたエリナー嬢がいる。

このような設定には、明らかに、母国と植民地との峻別がみられる。母国は、植民地人にとっては、絶ちがたい愛着を抱きながらも別れてきた過去の国でもある。総督が出迎えに出て、エリナー嬢が馬車から降りようとする瞬間に、思いがけない出来事が起る。一人の若者が群衆の中から飛び出し、彼女の前に俯し、自分の体を踏台として提供したのである。クラーク医師の説明によると、この若者の名はジャーヴァス・ヘルワイズ (Jervase Helwyse) といって、「由緒も財産もない生れで、自然があたえた頭と心以にはさして取柄もない男で、ロンドンにある植民地出先機関の事務員をしていた時に、不運にもこの婦人に恋をし、ひどく蔑まれて気狂いになった男である。」(A youth of no birth or fortune, or other advantages, save the mind and soul that nature gave him; and being secretary to our colonial in London, it was his misfortune to meet this Lady Eleanore Rochcliffe. He loved her — and her

3) Doubleday, N.F., *Hawthorne's Early Tales, A Critical Study*, Duke Univ. Pr., 1972, p. 129

4) Waggoner, H.H., *Hawthorne A Critical Study*, Harvard Univ. Pr., 1955, p. 261

scorn has driven him mad. p. 202) 彼女は、総督がステッキで若者を追い払おうとするのを制して、「容易にかなえられ、全くふさわしいこんな願いごとを聞き入れないのは可哀想ですよ。」(“It were a pity to deny them a favor so easily granted—and so well deserved!” p. 201)と「いたずら半分に」(playfully) 答えて、片足を男の背中にのせる。ホーソンの作品には、登場人物の相互関係や前後の状況を集約的に凝集した劇的場面を持つものが多いが⁵⁾、この場面もその一つであり、ここをいかに理解するかによって、この作品全体が大きく変わってくる。慎重な読みが要求される。

まず、女が恋に狂う男を踏みつけたことに対して語り手が述べている次の説明「この瞬間に描き出されたこれら二人の人物より、貴族制度や世襲的高慢が人間同士の自然な共感とか兄弟感をふみにじるのを示すより適切な表象はなかった。」(“...never, surely, was there an apter emblem of aristocracy and hereditary pride trampling on human sympathies and the kindred of nature, than these two figures presented at that moment. p. 201) に明らかなおとり、これは母国の世襲的貴族制度がもたらしたものである。一般化・抽象化するあまり、これを全ゆる人間の心に内在する高慢の表現であると理解するのは前後の脈絡を無視するものであり、あくまで、母国の制度を背負った女と、その女に狂う植民地人との関係でとらえられるべきである。ことわっておかねばならないが、積年の制度により醸し出される弊害がどれほど彼女の心を毒していたのか判然とはしない。しかし少なくともヘルワイズがロンドンで彼女に恋した時点では、まだ完全には犯されていない心の美しさが残っており、その美しさを男は愛したのであって、けっして貴族制度とかそれから生じた高慢な言動を愛したとは考えられない。「しかしこの場面をみていた植民地の群衆はこの瞬間の彼女の美しさに魅せられ、高慢もこの女には不可欠のものに思えて、一斉に称讃の拍手をするのである。」(Yet the spectators were so smitten with her beauty, and so essential did pride seem to the existence of such a creature, that they gave a simultaneous acclamation of applause. p. 201) 大衆は、彼女が男を踏みつけるのを高慢な行為とは受けとらず、その姿を美しいと思って賞讃した。大衆が見惚れた美しさは、ヘルワイズが愛したけがれない心の美しさとは異なり、言わば、高慢がもたらす美しさであった。このことについては後でもふれるが、エリナー嬢を、ヘルワイズが愛した本質的美しさを表わす内部と、大衆が賞讃した高慢という後天的性格を表わす外部とに分割することに注意したい。そして、この場面設定や彼女への女王に対するような扱いから明らかなように、彼女は母国を代表する人物として描かれている。とすると、彼女の内部と外部に相当するものが母国にも存在することになる。母国の外部は、既にみたように、世襲的貴族制度であり、けがれなき美しさを生み出す内部は英国本来の美点であると推測される。また、彼女が植民地の若者を踏みつけるこの場面は、母国が植民地を完全に支配している姿でもあり、大衆がこの女に拍手するのは、母国の支配に全面的に服従していることを示している。彼女の行為が「いたずら半分」であるのに対し、彼の方は笞打や監禁を覚悟した必死の行動であるのも、植民地支配の状況を明らかにしている。この場面を見て不満を表明するのは、I 節で引用したクラーク医師の「彼女が最下層の人々と同列に並ぶことになるかどうか今にわかるだろう。」という言葉のみであるが、これも単に彼女の高慢や軽蔑のもたらす悲惨な結末を予言しただけの言葉として受取るべきではなく、彼女を母国に対応させて考えて、この地にあつては母国本来の美点も貴族制度もともに死に絶えるべき運命にあることを暗示していると言えよう。同様のことは、彼女の到着を歓迎する祝砲がプロテスタント教会の甲いの鐘であったことについても言える。

数日後、公文書で招待状が出され、宮廷さながらのエリナー嬢歓迎舞踏会が催される。彼女は始めて刺繍した外套を着て現われるが、「この外套は死の迫った女の作ったものであり、その美しい奇抜なデザインは死の直前の譫妄状態から生み出されたもの」(It was the handiwork of a dying woman, and, perchance, owed the fantastic grace of its conception to the delirium of approaching death. p. 203) であり、これにも死の匂いが漂っている。舞踏会には多くの植民地人も招かれ、彼等が周囲にあつてエリナー嬢が中心に位置する状況は到着時の場面と同様である。時がたつにつれ、始めは主賓をとり囲んでいた多くの人々

5) そのもっとも代表的な例は「緋文字」(*The Scarlet Letter*)のさらし台の場面である。

も除々に離れていき、ついに四人の親王派だけになる。さらに、彼女はこの四人からも離れて、椅子に座りこんでしまう。「よくみると、彼女の顔は熱っぽく赤らんだり青くなったりし、それに応じてあふれんばかりに元気になるかとおもうと急にそうでなくなり、時には今にも床にくずれ落ちるかのようになり、だるくてどうしようもない苦しい表情をみせる。」(Some close observers, indeed, detected a feverish flush and alternate paleness of countenance, with corresponding flow and revulsion of spirits, and once or twice a painful and helpless betrayal of lassitude, as if she were on the point of sinking to the ground. p. 203) そうかと思うと身震いをし、元気をとり戻して、全く不可解な仕草や表情で、意地の悪い皮肉をあげせ、回りの人々は彼女が正気なのかどうかを疑うほどである。これは明らかに彼女の内面である変化が進行していることを示しており、それは彼女のけがれなき心の善と高慢を主とする悪の葛藤である。この斗いで善が亡び、悪が彼女の内面までも支配しそうになっていることは、今にも床にくずれ落ちそうな苦しいだるい表情や、狂人とも思える立振舞によって推測出来る。そしてヘルウィズが隅この椅子に座って一人孤高を保っている彼女に近づき、清められたワインを一口飲むように奨めた時、奨められるままに飲んでいたら、彼女の内面の善は絶滅することはなかったであろう。しかし四人の親王派によって邪魔されてこのワインがこぼれ、彼女の外套に吸い取られてしまった時、彼女の心の中の善なるものは完全に消滅し、後天的性格である高慢という悪によって征服されたとみることが出来る。前者は後者の活動を抑える力となっていたから、これ以後は悪が思いのままに彼女を支配することになる。

このような彼女の変化を彼女が具現している母国に対応させてみよう。前にも触れたように、かつてヘルウィズが愛した彼女の内面の美はイギリスが元来持っている本質的な長所を表わし、高慢な性格がこの美を亡ぼしたことは、貴族制度や世襲制の体制から生み出される弊害が母国本来の長所をも抹殺してしまったことを意味している。つまりこの植民地においてはイギリスの良さが消え失せ、体制の弊害のみが残ったことになる。そして彼女の高慢な性格＝母国の体制上の弊害、を象徴しているのが外套であり、内面の美を失った彼女は、今や、外套にのみすがって生きていく以外に術はない。それゆえに、ヘルウィズが「それを投げ捨てなさい。まだ遅すぎることはないかもしれない。その呪われた衣服を燃やしてしまいなさい。」(“Cast it from you! It may not be too late! Give the accursed garment to the flames!” p. 205) と両手を合わせて懇願しても、彼女は嘲笑して頭まで外套で包んでしまうのは当然であって、もし外套を脱いだら、彼女にはもはや何も残らず、亡骸同然となってしまふ。また、美しい顔を半分隠して今迄とは全然違った容貌になったのは、内部葛藤の終結を表わしている。「今あなたが見ているままの私の姿を忘れないでおきなさいよ。」(“Keep my image in your remembrance, as you behold it now.”) と彼女が別れに言ったのにたいし、ヘルウィズが弔いの鐘のような悲しい調子で、「私達は近いうちにまたあうでしょうが、その時あなたは今とは別の容貌をしており、それが私の心に残ることになるでしょう。」(We must meet shortly, when your face may wear another aspect — and that shall be the image that must abide within me. p. 205) と答えるのは、いまの彼女の姿は本源の内面的美しさを失った外見のみの末期の美しさであり、いずれはその本当の醜い姿を現わすことを見抜いているからであろう。かくして抑止力でもあった母国本来の美点は消えて、形骸化された悪のみが植民地を蹂躪することになる。しかしプロテスタント教会の弔いの鐘や外套の死の匂いに暗示されているとおり、いずれこの悪も亡びる運命にあった。

III

ここで節を改めたのは、この物語の後半のテーマと主人公は前半とは異なると筆者は考えるからである。つまり前半では、既に述べたように、エリナー嬢を中心とし、彼女の穢れない美しさと、外套に代表される高慢との葛藤を、母国の長所と制度から生ずる弊害とに対応させ、前者の后者による抹殺という結末になったのである。したがって、エリナー嬢にはもはや主体性はなく、彼女の殻となっている外套に支配されて

いる。後半の一方の主役はこの外套である。しかし後半には、ただ外套の猛威とその滅亡の過程の描写だけでなく、この外套に必死に抵抗するヘルウィズの姿がある。筆者はこの若者を後半の、そして物語全体の、主人公とし、彼の中にテーマを見出そうとしているのである。以下ストーリーに即して彼の姿をみていくことにする。

まず、少し前に戻って、彼がエリナー嬢に清められたワインを一口飲んで舞踏会に列席している人々にその杯を回すように奨めたことに注目しよう。この杯は甲の鐘を鳴らしたプロテスタント教会のものだった。ということは、単に彼女の心を清めるのではなく、アングリカンチャーチ (Anglican Church) からプロテスタントへの改宗の奨め、広義的には、アメリカ化 (Americanization) の奨めであったとみることが出来る。この内面からの改宗の試みが失敗した時、彼はせめてこの地を荒らす外套だけでも焼き捨てるように必死に懇願したのである。

外套はこのあとすぐに天然痘の病原菌となって猛威をふるい始める。伝染病というゴシック的要素との結びつきは、いささか短絡的で唐突な感をあたえるが、もはや害悪しか流さない外套という意味で、当時もつとも恐れられていた天然痘と結びつけられたものと理解したい。「総督官廷物語」のすべてにこのゴシック的連想はみられる⁶⁾。

舞踏会は予定より早く終わったが、これはクラーク医師が「ある深い秘密」(some deep secret) を総督に耳打したため、この秘密が何であったのかはホーソン独特の曖昧な表現で判然としない。しかしおそらく、この病の発生をいち早く発見したからであろう。ただ、清められたワインがこぼれて外套に吸いとられて間もなくして医師の耳打がなされるのは、エリナー嬢の内面の美が外套の活動を抑止する力となっていたことを証明している。天然痘という伝染媒体を得た外套は、エリナー嬢の側近を手始めに、植民地に滞在している上層階級をつぎつぎと倒し、ついには、一般大衆にも広がり始める。おそらく、大衆の中でも「母国の石のような殻で覆われた諸制度に対して不思議な愛着⁷⁾」を持つ人々が被害者となったと思われる。新生アメリカの誕生を信じ、母国の弊害の大きさを認識しているクラーク医師やヘルウィズは最後までこの病に罹ることはない。これは一種の英国病と言えよう。天然痘は街中に広がり、人々は汚染された空気を吸うことにおびえ、兄弟や友人との握手を控え、死者は生者の敬となる。これほど人心を分断させるものはなかった。植民地人の母国への精神的弱みや未練につけこむ病であるために、植民地議会でも手の施しようがなかった。外套はその人間性抹殺 (dehumanization) という役割を充分に発揮したのである。

こんなある日、ヘルウィズは総督官邸の柱によじ登り、この伝染病の征服の印ともなった旗を降し、それを持って官邸の中へは入って行く。そして旅立とうとしている総督に会う。これは、若者が外套のもたらす被害の除去にのりだしたと母国の政治的撤退を象徴する場面である。ヘルウィズはさらに奥へ進み、いまや見るも哀れに変わり果てたエリナー嬢を見出す。そして心の中の思いのたけを吐き出し、部屋中に轟く声で彼女を指弾し、嘲笑する。このことによって彼は完全に過去なる母国と訣別し、新しく真のアメリカ人として蘇生出来たのである。「ある新たな思いに駆られて」(Impelled by some new fantasy) 外套をもぎとり、邸から飛び出して行く。その夜彼は、この外套と旗を持ち市民の先頭にたつて街中を行進したのち、総督邸の前でエリナー嬢の身代りの人形もろとも焼きはらってしまう。それとともに天然痘も終焉にむかい、物語は終る。エリナー嬢がその後どうなったかはもはや問題ではない。

かくして外套という形で表わされた母国の貴族制度も植民地から払拭され、大衆はもはや英国病に罹ることはないだろう。そして我々は新しい国の誕生を目指して先頭に立つヘルウィズの姿を予想することが出来る。

以上、ストーリーを追ってこの物語の筆者なりの読みを述べてきた。第I節でも述べたように、このテーマを〈高慢〉とすることは容易である。しかし筆者にはそれは浅い読みがもたらす表面上のテーマにすぎないように思える。エリナー嬢の到着、若者を踏台にする——舞踏会の主役——一人椅子に座る彼女——病に

6) op. cit., Doubleday, p. 121

7) Hawthorne, N., *Centenary Edition V Our Old Home*, Ohio Univ. Pr., 1970, p. 60

倒れた衰れた姿——という表面の流れと、踏台として俯すヘルウィズ——ワインの奨め——官邸の旗を降す——彼女を見て高らかに笑う——街を先頭に立って行進し外套を焼却——という裏の流れを比較するとき、ヘルウィズの方が読者により深い感動を与え、作品をより意味深いものにしはしないだろうか。前者を筆者がとりたくない理由は、他ならぬそのテーマとなる〈高慢〉があまりにも強張され、表面に現われすぎていて、読者に嫌悪感をすら与えると思うからである。ヘルウィズの中にも「真のアメリカ人の誕生」というテーマは表面上はまったく現われず、彼の言動を通して推測されるのみである。それゆえに読者は彼の一つ一つの行動を象徴的なものと考え、それらが表わす真の意味を探ることが必要になってくる。そうすることによってこの作品はより意味深いものになるし、象徴の好きなホーソンらしい作品ともなると筆者は主張したい。

「真のアメリカ人の誕生」は、観点を変えれば、ヘルウィズのイニシエーション (Initiation) の完了と解することも出来る。彼が真のアメリカ人として未来に飛躍するためには、過去の愛、軽蔑、高慢その他の諸悪を経験し、克服しなければならなかったのだと言えよう。そして若者のイニシエーションというテーマも、ワゴナーの次の文にも明らかなように、多くのホーソンの作品にみられるものである。

The whole body of his work implies that we must accept the past, and the guilt it entails, before we can move with maturity into the future. This is one of the meanings into which Hawthorne's naive young man must always be initiated.⁸⁾

この節の終りに、ヘルウィズの狂気についてふれておこう。彼の狂気については、最初クラーク医師の説明があり、舞踏会においてはエリナー嬢の四人のお気に入り狂気を意味するいろいろな名前で呼びかけている。しかし物語の末尾になると、それまで一回もなかった語り手のヘルウィズの狂気を強調する言葉がひんぱんにみられる。

母国の本質的美しさをエリナー嬢の内面に見いだした彼は、植民地に帰ってからその美の存在を信じ、喜んで彼女の前に俯した。確かにこの姿は母国を断念した正常な植民地人にとっては異端であり、狂人と思えたであろう。クラーク医師が説明するように、彼女の傲慢と軽蔑が狂気に追いやったことも不可解ではないし、その後も人々から狂人扱いされることもありうることである。しかし語り手が大団円のところで, *mad*, *brain-stricken*, *lunatic*, *insane*, *crazed* 等と狂気を表わす全ゆる形容詞を使って強調しているのは、異常であるだけでなく、物語の展開と矛盾している。なぜなら、エリナー嬢の到着の時は除くとしても、その後のヘルウィズの言動は単なる狂人の支離滅裂なものとは決して受けとれないからである。彼には正常な人間としての役割が与えられ、そのように読むことが要請されている。しかもこの狂気の繰返しが、彼が彼女の悔めな姿を見て、完全に過去を払拭してアメリカ人として独立したとみられる時点でのことであるために、ますます奇異にみえる。ここには次節で述べるこの作品に対する作者のある意図が働いていると筆者は考える。いずれにしろ、この矛盾はこの物語の中だけでは説明出来ない。

IV

これまで、この作品をヘルウィズを主人公とし、真のアメリカ人の誕生をテーマとしてとらえることを示してきたが、筆者はこのテーマを最初から作者が意図していたのではないかと推測している。つまり、一読者が作品の中にこのテーマを見出しうるだけでなく、作者が最初からこれをテーマに設定していたのだ。この推測の理由は二つあって、以下このことについて述べてみたい。

8) op. cit., Waggoner, p. 65

その第一の理由はこの作品が発表された月刊雑誌に関係している。この作品は1838年に *The Democratic Review* に発表された。この月刊誌は1837年10月、23才のサリバン (O'Sullivan) という青年実業家とラントリー (S. D. Langtree) の二人によって創立されたものである。後者については詳細は不明である。ホーソンに作品の発表を頼んだのはサリバンで、この時以来二人は親交を結び、家族ぐるみで互いに助け合ったようである。

この雑誌は原稿料も高く、12年間の習作時代を過ぎた後の彼には最良の発表機関のように思えた。彼はこれに1838—9年に7編、1843—4年に17編の短編を発表している。サリバンは好戦的国粋主義者で「民主党急進派」(Loco-foco) であり、この雑誌もそのような政治思想のもとで設立された。彼が創刊号に載せた序文の一部を引用してみよう。

The anti-democratic character of our literature, then, is a main cause of the evil of which we complain; and this is both a mutual cause and effect, constantly acting and re-acting. Our "better-educated classes" drink in an anti-democratic habit of feeling and thinking from the copious, and it must be confessed delicious, fountain of the literature of England; they give the same spirit to our own, in which we have little or nothing that is truly democratic and American. Hence this tone of sentiment of our literary institutions and of our learned professions, poisoning at the spring the young mind of our people.⁹⁾

つまり、アメリカ文学の非民主性が悪の一原因である。高度の教育を受ければ受けるほどイギリスの非民主的な感じ方や思考法に染まり、真に民主的、アメリカ的なものは生れない。アメリカ文学界や学界のこの風潮が若者の心を毒している。民主主義の栄光と偉大さを文学に注入することによって、この悪を除去しようではないかと呼びかけているのである。

このようなはっきりした編集方針の雑誌に掲載を希望する以上、これに明確に反するような作品は書けなかったことは容易に想像出来る。ホーソン自身もこの作品を発表した年に民主党に入党しているし、自分を「民主党急進派調査官」¹⁰⁾とも呼んでいるから、サリバンのこの考えに共鳴していたと思われる。しかし彼が作家として作品を書く場合には事情は全く異っていた。彼の作品のいずれを取りあげても明らかだが、ホーソンという作家は未来や進歩を高らかに謳歌するような人ではない。むしろその反対であって、彼の目は常に過去や人の心の奥へ向けられていた。そして現実が問題となるとすれば、それは過去とのつながりの上においてであり、過去を断ち切ったの現実には彼には考えられなかった。他国にあって、アメリカの生活構造に欠けている高度の文明の諸項目を並びたて、「文学が育つには、蔦や地衣などのように、やはり腐った土壌が必要なのだ。」¹¹⁾という言葉はこの作家の気持をよく表わしている。つまり要約すれば、作家としてのホーソンとそれを離れた時の彼との間には大きな思想上の分裂があったと言えよう¹²⁾。一人のアメリカ人としての彼は愛国的で、自国の未来と民主主義の正しさを信じた。作家としては過去とのつながりを重視し、人間の心の罪深さに固執した。この内部対立は彼のイギリスに対する態度にも明らかである。

England both attracted and repelled: attracted (it may not be too misleading to say) the imaginative writer, and repelled the American patriot. ……The psychological result was

9) op. cit., Doubleday, p. 119

10) *Centenary Edition I The Scarlet Letter*, p. 8

11) *Centenary Edition IV The Marble Faun*, p. 3

12) この大きな分裂は彼の伝記作者たちを悩ませたようである。cf. Foster, R. (ed.), *Six American Novelists of the 19th Century*, Univ. of Minnesota Pr., 1960, p. 50

an acute mental conflict. 13)

以上の事情から、彼がこの作品を書き始める時点では、創立一年以内の月刊誌の方針が大きな制約、いや最初から与えられたテーマとなっていたのではないかと推測される。この推測は筆者のみでなく、ダブルデイは「総督官邸物語」の全てに雑誌の方針が影響していると述べ、このような一連の物語をサリバンが要求したのではないかとさえ疑っている。¹⁴⁾ 出版状況も悪く、経済的にも逼迫し、また民主党員としての彼自身も同調していたから、作家としての彼もこれに従わざるをえなかったのではないか。しかしもちろん、この作家は彼独自の方法でこのテーマを消化した。母国イギリスを悪の根源としてあからさまに非難したり、植民地人の希望にあふれ自信に満ちた独立への歩みを高らかに讃美することは彼には出来なかった。したがって、このテーマは出来るだけ抑え、表面に出さないような工夫がなされた。つまり、貴族制度の弊害を高慢に代表させ、さらにそれを天然痘へと変えていったことや、高慢の罪深さをしつこいほどに繰り返して強調するのも、作家としてのホーソンが容認したくないこのテーマを隠そうとする努力の現われであるとみることが出来る。また、Ⅲ節の末尾でふれたヘルワイズの狂気についても同様のことが言える。すなわち、過去を断つことこそが狂気の沙汰だと確信しているこの作家には、大衆の先頭にたつヘルワイズを正気の真のアメリカ人として描出することはやはり許せないことだった。

第二の理由は、第一の理由とも関連するが、この作品に付属している前書きと後書きに見出すことが出来る。四つの「総督官邸物語」には、それぞれ3、4頁の前書きと半頁ぐらいの後書きがあり、物語が語られる前後の経緯が記されている¹⁵⁾。それによると、まず一人称の作者がボストンのワシントン通りを歩いて行き、今や居酒屋に変わって総督官邸に入る。昔の面影を偲びながら酒をくみかわすうちに、チーフアニー (Tiffany) という老紳士が店の主人と作者を聞き手にして物語り始めるという設定である。この居酒屋は物語の場所としてだけでなく、作者が1838年という現実から過去へ逃避する場所ともなっている。始めの二つは語り手も聞き手も同じであるが、三番目の「エリナー嬢の外套」では一人の老忠臣 (the old loyalist) が聞き手として加わっている。彼は貴族の出身であり、「王族への愛着やそれに関連している植民地時代の制度や習慣への愛着は、その後の民主主義という異教に決して屈することはなかった」(…whose attachment to royalty, and to the colonial institutions and customs that were connected with it, had never yielded to the democratic heresies of after-times. p. 199) し、イギリスにおいてすらこの老人のような忠臣を見出すことは出来なかった。この新たな聞き手を加えてこの物語が語られた後、作者は次の物語をこの老忠臣に語らせることを予告している。そして四番目の「老エスター・ダドレイ」(Old Esther Dudley) は「真のアメリカ人の誕生」というテーマとは正反対の、過去にのみ生きる女の物語である。この老婦人は、植民地最後の総督が帰国した後もこの地に留まり、いつの日か再び母国がこの地を支配することを固く信じ、ありし日の習慣を守り続ける。また、新時代の子供達を総督邸に招いて、彼等に過去を吹き込むのである。

このように、前書きでの老忠臣の参加——アメリカ人の誕生というテーマ——老忠臣の語り——過去にのみ生きるエスター——とたどってくると、おのずから次のような推測が可能である。つまり、作者は「エリナー嬢の外套」のテーマを出来るだけ抑えるような工夫をしたが、それでも彼には不十分に思えた。(あるいはこのことを最初から予測していたとも考えられる。前書き、後書きを物語と同時に書いたか、後から追加したかは不明である。)だから、彼は老忠臣を巧妙に配置し、前のテーマを否定する意図をもって次の作

13) Stewart, R., *Introduction to the English Notebooks by N. Hawthorne*, Modern Language America, 1941, p. iv

14) op. cit., Doubleday, p. 118

15) この前後の文章を作品の一部とみるかどうかはここでは問題にしない。筆者は一応、物語と切離して考えている。

品を正反対のものにしたのだと。そしてこの推測を逆に言い直せば、「エリナー嬢の外套」のテーマを作者は最初から過去を断った「アメリカ人の誕生」としていたと云える。

エスター・ダドレイは *The Democratic Review* の編集方針に全く反するものであった。それ故に作者は、物語の最後の一頁にマサチューセッツ知事を登場させ、過去との訣別と未来への前進を滔々と語らしている。この知事の突然の出現と彼の演説の結びの言葉：「市民達よ、前進だ！前進だ！我々はもはや過去の子供ではない！」（“My fellow-citizens, onward — onward! We are no longer children of the Past!” p. 221）をみれば、月刊誌の方針がこれらの作品にいかにか大きな影響を及ぼしているかを知ることが出来る。それまでの物語を根底から覆すような一頁を最後に挿入せざるを得なかった作家の苦悩は、後書きにある次の言葉「もう当分はここを訪れない決意をして、別れも告げずに立ち去った。」（I retired unbidden, — being resolved not to show my face in the Province House for a good while hence — if ever, p. 221）によく表われている。

V

ジェイムズは四つの「総督官邸物語」を賞讃しているが¹⁶⁾それはホーソンの魅力的な筆致でワシントン通りの浅薄な古さを潤色したことに対する感謝の気持から発せられた言葉であり、決してこの作品のようなアレゴリーを認めたものではなかった。アレゴリーとして作品が成功することは極めて稀である。道徳的、心理的領域に熟知し、軽妙な筆の流れをみせる彼にも、その文体に晦澁や平板が認められる。

この作品は、云わば、ホーソンという本来の作家とサリバンに追従する民主党急進派の合作である。相対立する両者の妥協の産物と換言してもよい。後者の強力な力を意識するあまり、実際に執筆した前者は、他の作品においては末尾にそっと挿入するだけで十分に満足出来る自分の主張を繰返し強張する破目になった。そのために主張は単調にならざるをえなかった。洞穴のような心奥の世界を暗示的に、曖昧に象徴的に描写する彼独特の手法はこの相剋のために見失われてしまったようである。そして作品だけで判断した場合、皮肉にも、作者が出来るだけ抑えようとしたヘルワイズの姿が、より深い所で読者の心を動かす力を持っている。ヘルワイズの言動が象徴的意味を持っていると感ずるのは筆者のみではなからう。しかし、エリナー嬢からヘルワイズへ視点を移し、新たな意味を作品に付加出来たとしても、この作品の欠点は依然として消える訳ではない。彼女はやはり、薄っぺらな高慢の代名詞に他ならないし、それがもたらす病の悲惨さも読者に感銘を与えてはくれない。ただ筆者としては、作品の一面のみを読んで全てとする評価に不満を感じ、「一人のアメリカ人の誕生」をテーマとしても読める作品とすることによって、今後の評価の再検討に役立てたいと願ったのである。論旨が意のままに主張出来ず、牽強附会に陥ったのではないかと恐れている。

16) James, H., *Hawthorne*, Cornell Univ. Pr., 1879, p. 90